
日記

燐光蘭歌

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日記

【Nコード】

N8219C

【作者名】

燐洸蘭歌

【あらすじ】

10年ぶりに集まった、吹奏楽部員。それぞれ、日記を持っている。その日記に書いてあることそれは・・・

1 ページ目

とあるホテルの小さな宴会場

一人の女性がすでに居たが窓の外を眺めている。

また一人女性が入ってきたが既に居る女性は気づかず、入ってきた女性が肩をたたき声を掛ける

「裕香^{ゆづか}、久しぶり」

肩を叩かれた事で驚きつつも振り返り相手を確認めると

「里恵^{りえ}！げんきだった？」

「もちろん。今日何人ぐらいくるの？」

「えーつと、59期から61期のメンバーと、58期の先輩が何人か」

「そっかー・・・でも何人かはこないのかな？」

「うーん・・・宮村さんとか来るかな・・・」

「宮っさんなら来ると思うけど・・・」

そう話しているうちにだんだん人が集まりだし、二人に声をかけたりする。

「西ちゃん。久しぶり」

「えつと宮っさんでしょ。その声の掛け方は」

「あたりい」

「里恵の言った通りだね」

「何の事？」

「裕香がさ、宮っさんこないんじゃないかって」

「酷！稲崎^{いなさき}さん酷いよ」

「まあまあ。だってまだ宮村さんの事だからまだあの事引きずって
ると思つてさ」

「確かにそうだけど・・・」

少し人物を整理しようと思う。

一番初めに会場にいたのは稲崎裕香^{いなさきゆうか}59期生の吹奏楽部部長である
続いてきたのが安西里恵^{あんさいりえ}彼女も59期生である

会話に入ってきた車椅子に乗った女性が宮村真弓^{みやむらまゆみ}言う必要がないか
もしれないが59期生だ

そして今日は吹奏楽部の58期から61期までの同窓会（?!）で
ある。主催者と言うか招集をかけたのは稲崎だったりする

「ねえ裕香、出席者の確認しないと・・・」

「美世莉それは大丈夫。真実と綾芽ちゃんに頼んだから」

「氷川さん久しぶり」

「みつちゃん!!」

「きや里恵やめて」

「西ちゃん!!」

安西に抱きつかれそうになり悲鳴をあげた氷川美世莉も59期生。
会話中の真実は倉田真実、綾芽は小瑠璃綾芽
二人とも59期の副部長である

「相変わらず、あの4人の先輩はにぎやかだね、京太」
「だな」

「ここ6人も十分にぎやかだと思っけどな。そう思わない？一哉^{かずや}」

「うん。同感。で、征哉は誰から聞いたの？」

「えっと・・・き・・・」

「僕だよ。おしえたの」

「京太、征哉に聞いてんだから口出ししない方が・・・」

「神龍の言っ通りだよ」

一気に笑い声が起こる。（周りは何事？という目で見ていたが）

ついでに、上から
ふるたにしゅんすけ　こくれきようた　ゆむらひろし　はりみやかすや
古谷駿介、小暮京太、湯村浩、針宮一哉、小雅征哉、小暮、神宮龍
二、小雅

の順で話している。全員60期生。

「やあひさしぶり」

「あ、武藤先輩！！」

「で、俺も居るけどね」

「平先輩^{ひらい}」

上から武藤拓斗^{むとうたくと}、小雅、平健輔^{ひらけんすけ}、針宮。

武藤は58期、平は59期。

「これで、あいつらもくれば男子は全員パーフェクトなんだけどな」と湯村。

「お呼びでしょうか？」

「呼ばれたんで飛び出しました（笑）」

「石村、滝原、先輩に初っ端からそれは無いだろ」

8人の背後から笑いを含んだ声を掛ける3人組
いしむらだいき たきはらゆうき おかさきこうた
上から石村大樹、滝原祐樹、岡崎浩太
全員61期生

「おわっ！・・・あのさ、滝原ネタ古いよ、それと急に出てくるな」

「ですかねえ」

「だから言つたろ」

「流石に7年前のは許されないよ」

再び笑いが起きる。

2ページ目

「相変わらず先輩たちはにぎやかだよねえ。と言っより変わらないね。特に宮村先輩と安西先輩」

「そう言う晴香も変わらないよ」

「えーだったら妃芽香だつてえ」

上から武藤^{むつはるか}晴香、矢部^{やへひめか}妃芽香ともに61期生。

「兄さん達の仲も変わってないね」

「そうだね」

兄さんとは58期の武藤拓斗のこと。二人は苗字で分かる通り兄^{きょうだい}妹である。

「このメンバーは中学卒業以来か？」

「だろうね。高校行つてからあまり集まらなかったもん」

「ま、皆変わつてないけどね」

「沙子ぐらいじゃない？変わったの」

「そんな事無いよ。変わつてないって」

上から小野寺綾子、中川由香里、小原沙子、森山麻琴、小原。
全員61期。再会頻度は極稀。

「さーてまた京太に悪戯すつか」

「綾、それやめたら？」

小野寺のふざけに中川が釘を刺す。中学在学中は良く見た光景だ。

「野沢く久しぶり」

「谷さん！！ひさしぶりだねえ。1年ぶりかな？」

「だねえく・・おい武藤」

「あ、谷さん、野沢さん。久しぶり」

上から谷真衣子、野沢亜唯歌、谷、武藤。
3人とも58期生。

「ほんと久しぶりだなあ。特に武藤とは全く会わなかったし」

「確かにね。でも谷さんとは時々会ったよ。電車の中で」

「そう言えばそうだね」

野沢が武藤に言い、谷が相づちを打つ。

「真衣子、野沢、ムト、久しぶり」

「あ、木田さん。久しぶり」

「これであと、小田が来れば58期はパーフェクトか・・」

「野沢なんで？」

「3役はって意味」

「なるほど」

上から木田真由華、武藤、野沢、谷、野沢、木田。
ムトとは武藤の事。木田と武藤は58期の部長副部長。
ついでに今日来てる3役を上げると

部長 副部長

58期、木田 武藤

59期、稻崎 倉田、小瑠璃

60期、小暮 古谷

61期、 武藤

全員揃っているのは59期だけである。更についでだが武藤兄妹は
見ての通り2人とも副部長を経験した

「裕香、時間過ぎたけど結局これだけしか来てないや・・・」

「えっ・・・25人だけ!!」

小瑠璃が、稲崎に名簿を渡しながら言う。稲崎はその人数を数えてあ然とする。

「ほんとだよ。何で皆こないのかな・・・」

「まあ・・・仕方ないって事で。真実、綾芽ちゃん、ありがとう」

倉田が話に入ってきたが、稲崎は礼を言って済ませる。

「そつだ皆、例の物もってきたかな？」

「持ってきてるでしょ。吹奏楽部にいたときの思い出のなんだから」

「じゃあ、適当に挨拶済まして、皆で例の物見たり話したりにしようか」

「賛成」

稲崎の言う、例の物、とは何か？

それは稲崎の挨拶が終われば分かるだろう

3 ページ目

「木田先輩一寸良いですか？あと、小暮君も」

「え、いいけど」

「なんすか？」

稲崎が、木田と小暮に声を掛け前の方に移動する。

「一応、今日来てる部長には少しだけ話をして貰おうと思ったんですけど・・・」

「え・・・稲崎先輩、ちよっ・・・」

「良いよ。手短にやるから。小暮君もやるよね」

小暮が言つの遮って木田が言う。小暮には有無を言わせないような調子である。

「・・・やります・・・」

小暮は諦めたのか素直に言う。

「それじゃあ、最後に木田先輩御願います」

稲崎と小暮の話が終わり（二人とも短かったが）小瑠璃が木田に前に出るように促がす

「はい。皆久しぶりです。今日は皆で楽しみましょう。以上です」

木田も短く終わらせる。

「この後は、時間になるまで話したりしてください」

小瑠璃がそう言って皆、それぞれ話し始める。

「そう言えばさ、例あの物持れってきた？」

稲崎が数名（安西、氷川、小瑠璃、宮村、倉田）に言う。

「もちろん持ってこないわけ無いじゃん」

「持ってきたけど・・・あの日から1週間ぐらい空欄になってる・

」

「仕方ないって、書いて無くっても」

上から、倉田、宮村、安西。

そっぴいながら、取り出したのは小さめのノート。表紙には『日記』、もしくは『吹奏楽部日記』などと書いてある。

「これは伝統だもんね。・・・そうだ！どうせならさ今居るみんなで交換して読もうよ」

「え・・・」

「賛成！！皆に声かけるね」

小瑠璃の発言に氷川は難色を示し（というか一歩引いた）稲崎は賛成し、皆に声を掛け日記交換をする

ちなみに、伝統言うのは吹奏楽部で2年生は2年間（卒業まで）日記を書くというものである。

皆が交換してる中、宮村は少し離れた所でその様子を見ていた。安西はそれに気がつき、声を掛ける。

「宮っさんは交換してないの？」

「うん。人数的にあまるから。それに字汚し、動きにくいし」

「見せて！」

「あ、ちよつと・・・じゃあ西ちゃんのも見せてよね」

「いいよ。僕も汚いけど」

宮野は車椅子のため安西が立つと手が届かない。そのため、安西と日記を交換する事にした。

安西の日記帳の表紙には色々な色で『日記帳』、宮野の表紙には黒で『吹奏楽日記』と書かれている。

この時点で二人の性格の違いがわかるだろう

書いてあることは全く違うが、3日ほど同じ事が書いてある。それは定期演奏会と、卒業式、そして・

「宮っさん、やっぱりあの事書いてあるね」

「西ちゃんも書いてるじゃん」

安西は不満そうな表情、宮野は怒りと悲しみの混じった表情で日記を見つめている

「宮村先輩、安西先輩、見せてください・・・どうしたんですか？」

「え、ごめん京太、良いよ。私のは西ちゃんが持つてるから見て」

「僕のは宮っさんがもってる」

小暮が二人の所に来て二人に声を掛けるが、二人の表情を見て怪訝な顔をする。

だが、宮野と安西は3人で日記を見る事に賛成する。

「やっぱり先輩たちかいてますねあの事」

「体中痛いし足の感覚無いしで書く力なかったんだけど、一行だけでも書こうと思って思ってた」

「重大な事でもあるからさ、中学が燃えたのは・・・」

「俺、あれから将来の方向を変えて、消防士になりました」

「え、小暮君が消防士！」

「ありえねえ」

ここであの事、つまり中学が燃えた日の事を3人の日記で見てもよい。

2月×日（Mon）曇り（但し降水確率0%）

今日、部活が始まったばかりの頃に学校が燃えた。

2階の第一理科室から火が出たらしいけど、アルコールランプでも使っていたのだろうか？

音楽室は3階だから、逃げられるか不安だった。

案の定火の回りが速かったし、第2理科室からはガス漏れをしていたらしく、3階まで火が来るのは

あつという間だった。今考えると音楽室に行く時、第2理科室前とかがガス臭かった気がする。

でもガス爆発で音楽室の床が吹っ飛ばなかったのが凄いかもしれない体育館の方は大変だったらしい。

大体は窓から避難用ので逃げる事ができたけど、途中でそれは燃えてしまった。

宮っさんと武藤さん矢部さんが逃げる事が出来なかった。

3人はまだ燃えていない部室の方に行って窓から逃げようとしたらしい。

確かに窓には耐震用の枠組みがあって降りる事は可能だと思う。それでどうしたかはわからない。詳しい事を聞いてないから。

判っているのは、パークスの部室にあるロープで2階の少し上（そこは燃えていなかった）まで降り、

もう一本のロープで、1階の枠組みまで降りたということ。

ただ、武藤さんが2階から、1階へ降りようとしたらロープが切れたらしい。

幸い、枠組みを掴む事が出来たそうで、手首の捻挫で済んだ。

けど宮つさんはロープがもう使えないから枠組みをつかんで降りる事に下らしいけど、

手が滑ってそのまま地面に落ち、病院行きになったらしい。

まあ僕もぼーとしてたから聞いてなかったけど。

一つ頭に来るのはあのハゲ顧問。何で切れるわけ？避難が遅かったって。

裕香の現状説明も聞かないで、それにあの中で楽器を持って避難しろともいいたいのか？

小暮君がハゲ顧問を呼びに来たけど黙殺したため、荻原先生をよんおぎはらで駐車場兼学校裏に

走っていった（僕達は学校から少しはなれたテニスコートで人数確認が終了した部から下校となった）

その後、皆でハゲに対して切れまくってから、一回学校の方へ移動してパートごとに確認をして、

勝手に下校した。（鞆を校庭に置いていたから戻った。）

顧問に連絡を入れる気は副部長や部長ですら全く無い。多分少ししたら部内の連絡網を使っただろう。

それに明日は公園に集合する事になっている。

暫く臨時休校になる。原因究明とかするらしい。

安西の日記より

月 日 ()

昨日学校が火事になった。火元は理科室らしい。体中が痛い。地面ではなく車の上に落ちた。さつき麻酔が切れた。日付がかわってる。1時間過ぎてる。医者に一生歩けないと言われた。幼稚園教諭の夢は諦める。でも吹奏楽・音楽だけは続けたい

宮野の日記より

2月×日(月曜日)曇り

学校で火事が起きた火元は理科室。1年理科担当が理科室で煙草を吸っていたら火がついたらしい。母親の情報網で教えてもらった。信憑性は・・・49%・・・もし本当なら、学校や理科室で煙草吸うな！だなまず始めに言うべきは。

怪我人の方は友達などから聞いて、コーラス部2人に男バレ5人、女バレ6人に吹奏楽が2人。

コーラス部は慌てた為、転倒による切り傷。男女バレ部は体育館で練習していた事による火傷。

体育館は、第2理科室の上で第2理科室のガス漏れからガス爆発が

起きて、床が吹っ飛んだそうだ。

でも、吹奏樂が一番怪我の程度がやばいかも知らない。

武藤さんの手首捻挫と、宮村先輩の全身強打。場合によって宮村先輩は歩く事が出来ないかもしれない

矢部さん（怪我した二人と矢部さんは逃げ遅れた。）が稲崎先輩と僕を呼びにきた事でこの事を知った

菊村先生は黙殺と言うか無視して、僕達に切れていた。

現状確認をした後、稲崎先輩に

「菊村先生呼んで来て、駄目なら荻原先生」

といわれ、菊村先生はぜんぜん聞いてくれなかった為、荻原先生おぎはらを呼びに行った。

荻原先生はすぐにそこへ行ってくれた。荻原先生にほめられたのは始めてだと思う。

「今回の稲崎の指示と小暮の行動は正しい」と、

その後学校の向かいの家の人が消防車と救急車を呼んでくれたそう
で宮野先輩と付き添いと言う形で、

荻原先生と稲崎先輩は病院に行った。

僕は皆に経過を説明しておいてといわれたから皆の所に帰ろうとしたら、皆が校庭の方に来た。

稲崎先輩に言われたように経過を説明した後、先生に会わないように下校した。

明日は公園に集合が掛かっている。簡単な部員会議をやるつもりだ。

小暮の日記より

「二人とも書いてあることが過激だよね」

「宮野先輩、色々言ってもう行も書いてるじゃないですか」

「そう言えば宮っさんは仕事何やってるの？」

「物書き。小説書いてる」

「で、その小説担当が私だよ」

「のわっ谷先輩驚かさないで下さいよ」

「小暮君、驚きすぎ」

「今日は催促受け付けませんからね。それと西ちゃんは仕事何してるの？」

「通訳。てか、催促って何？」

「宮野さんたらなかなか続き書いてくれなくて。まあ締め切りは来月だけど」

「来月なら無理にせかす必要ないんじゃないですか？」

「そうは行かないんだよ、京太。コイツ、締め切り近くなってあせるから今から急かしてるの」

「そう言つところ変わってないね宮っさん」

「るせえ」

笑いが起きるが気にならない。なぜなら周りも笑ったりが多いから。

3 ページ目（後書き）

登場人物などがややこしくなってきたしまいました。
そのうち、登場人物を整理するページを作ろうと思います。

キャラ紹介（前書き）

名前（3役or学生指揮者）担当楽器名の順です

キャラ紹介

58期

木田真由華
きたまゆか

部長 パーカッション

谷真衣子
たにまいこ

コントラバス

野沢亜伊歌
のざわあいか

ユーホニウム

武藤拓斗
むとうたくと

副部長 ホルン

59期

稲崎裕香
いなさきゆうか

部長 クラリネット

安西里恵
あんざいりえ

ホルン

氷川美世莉
ひかわみより

フルート、ピッコロ

倉田真実
くらたまみ

副部長 ホルン

小瑠璃綾芽
こるりあやめ

副部長 フルート

宮村真弓
みやむらまゆみ

パーカッション

平健輔
ひらけんすけ

トランペット

60期

小野寺彩子
おのてらあやこ

パーカッション

中川由香里
なかがわゆかり

クラリネット

森山麻琴
もりやままこと

サックス

小原沙子
こはらあやこ

トランペット

小暮京太
こくれきやうた

部長 トロンボーン

古谷駿介
ふるやしゅんすけ

副部長 ホルン

湯村 浩 ゆむらひろし

トランペット

針宮 一哉 はりみやかずや

サックス

小雅 征治 こがせいじ

チューバ

神宮 龍二 じんぐうりゅうじ

学生指揮者 トロンボーン

61期

矢部 妃芽香 やべひめか

パーカッション

武藤 晴香 むとうはるか

副部長 トランペット

石村 大樹 いしはらたいき

パーカッション バスクラリネット

滝原 祐樹 たきはらゆうき

チューバ

岡崎 浩太 おかざきこうた

トランペット

以上（確認者、小瑠璃綾芽、倉田真実）

本来は、60人ぐらいの人数なのだが、今日の参加者は25名。
まあ古傷を触りたくないってのが本心なのかな？色々あったし（稲
崎談）

先生がこないなら自分もこないって人も居るからなあ。
それに先生は既に死んでるし（木田談）

もつと来ると思っていたんだけど・・・
けど、男は全員揃ったしいかと・・・（小暮談）

キャラ紹介（後書き）

やっぱ、人数多いです。
（汗
でも頑張ってます

4 ページ目

夕方になり、外が暗くなり始める。多くはもう帰って行っただが、一部は最後までいるつもりらしい

「後40分ぐらいで、終わりにしますね」

稲崎が、残っている全員に声を掛ける。

「もうそんな時間かぁ……」

安西が、誰に言うわけでもなく言う。

「まあ、結構帰っちゃったし、残ってるのは……うちと西ちゃん、裕香と谷先輩と武藤先輩、京太と神龍の7人啊」

「ねえみやっさん、また集まれるかな？今日みたいに」

「集まれるだろ、別に今日で皆いなくなる訳じゃないんだから」

「そっだよ安西さん。また集まるって。集まったりするのがすきの多いから」

「そうですね……そう言えばみやっさんはどんな小説かいてるの？」

「え……秘密。谷先輩、言わないで下さいね」

「判った」

「えーずるい」

「悔しかったら、本探してみな」

「宣伝ですか？みやつさん？」

「当たり前じゃん」

「じゃあ図書館で探す」

「え・・買ってよ。売上悪いんだから」

安西と宮野、谷の楽しい会話は暫く続いた。

「なあ神龍は最後までいる？」

「ああ、京太は？」

「もちろんいる。今更帰るのもなんだし・・・あれ？携帯がなってる？」

「携帯ぐらいでなよ。仕事だったら大変だから」

「そうですね」

そう言つて京太は会場の外に出るが暫くして急いで戻り、稲崎に声を掛ける。

「先輩、仕事なんで帰ります。本当は最後までいたかったんですけど・・・」

「良いよ。消防士でしょ、小暮君は。またそのうち集まるかもしれないし」

「はい。それじゃあ・・・」

そう言つて小暮は大急ぎで会場から飛び出し、所属する消防署へ向かう。

4 ページ目（後書き）

少しずつ、最後に近づいています。
まだ私にも結末はわかりません。
（オイ
多分、死者は出ないと思います

5 ページ目

「予定より早いですが、お開きにしますね」

稲崎が声を掛けたのは、5：25。終了予定の5分前だった。ついでに言うと、小暮が出て行ってから20分後

「裕香、この後何も無かったら、一緒に出かけない？」

「いいよ、里恵。けどちょっと待ってて。代金払ってくるから」

「わかった」

「武藤先輩、少し早いですけど夕食でも食べに行来ませんか？谷先輩と宮野先輩も」

「いいね」

「うちらもいいよね」

「はい」

そんな会話が交わされている。

「これで解散ですね。・・・じゃあ武藤先輩何か一言」

「な、何で僕？」

「え、だって副部長だったじゃないですか」

「そうだよ。武藤、とりあえずやれ」

「はぁ……えっと、またいつか集まる事があつたら、集まりましょう。以上、解散！」

武藤の解散宣言のあと、それぞれ帰っていく。（といいつつも、2グループになってたり）

武藤、神保、谷、宮野は、谷の車で、移動していた。
夕食をどこで食べるかまだ決まっていなかったので、とりあえず、走っているという状態。

「そう言えばさうちらが卒業する時、武藤と宮野さんは色々関係が

話題になったけどどうなったの？」

「え・・・」

「な、何の事ですか？」

「そう言えば、その頃宮野先輩が、武藤先輩の事を片思いしてるとか、噂がありませんでした？」

運転している谷の急な話題に、後ろの乗っている二人は軽く頬が赤くなった。（特に宮野）
谷の隣に座っている神保は面白そうにそのときの噂を思い出して言う。

「そ、そんな噂デマだよ。ねえ宮野さん」

「は、はい。谷先輩、神龍、なに言っんですか？」

「ふーん野沢の話だと、宮野さんが、武藤に告ったとか聞いたけど？」

「本当ですか？後ろのお二方？」

（野沢さん、どこから聞いたんだよ・・・）

（野沢先輩、いくらなんでも酷い、どこから聞いたんだろ）

（凶星だろうな。先輩顔赤いし）

（野沢が知ってるって知らなかったのか？）

それぞれの心の中の事である
後ろの二人は、更に顔を赤くする。

「あれ・・・先輩、あっちって中学ですよね？」

「そうだけど、話題変えないでよ」

「いや、変えるつもりは無いんですけど、妙に明るいなと思って」

「え、・・・ついでに、煙が出てる気がするけど・・・」

「行ってみますか？野次馬として」

「行くには行くけど、野次馬じゃなくって卒業生としてね」

谷は細い路地に入り中学校のほうへ車を走らせる

5 ページ目（後書き）

中学校では何が起こっているのか？

後2ページ分ほど終わりますが、結末は考え中です。

6 ページ目

中学校に向うに連れて、だんだん明るくなってくる。

「・・・・・・・・やっぱり火事だ」

「どこかで車とめるから、皆先行ってて」

そう言って谷は、他の者を下ろして車をどこかに止めに行く。

「10年前と同じ・・・・・・・・」

「まさか・・・・・・・・」

神保と武藤は校舎を見上げ、つぶやく。

宮村は何も言わず校舎を見上げていたが、

「！怖い……」

「えっ……どうしたの宮村さん」

「怖い、怖い……」

俯いたまま怖いと繰り返す。そんな宮村の肩に着いたばかりの谷が手を置き、言った。

「大丈夫、怖くない」

「……うん……」

「谷さん？」

「何でか知らないけど、火を見ると怖がるんだ。だから台所でガスコンロを使う事も無いの」

「……多分、中学校の時に火事が起きてる中に取り残された事のトラウマじゃないでしょうか？」

「神龍、それどう言うこと？」

「僕が勤めてる病院の精神科にも結構いるんです。過去の何かしらの原因があつて水を見るのが怖いとか先輩のように火を見るのが怖い人」

「そっか……ん？あれって京太？ほらあそこで並んでる消防

士」

「……あ、本当だ」

「この近くに配属されてるのかな？」

「そうじゃないですか？遠くからはないと思いますし」

小暮達、消防士が学校の中へ入っていくのを見届けた後、また校舎のほうに向き

燃えていく校舎を見つめていた。

「被害は最小限にしろ！」

「はい！」

「隊長、今入った連絡ですが中に残されている生徒がいると・・・」

「なっ・・・場所は？」

「音楽室なのですが、管理棟の3階へ行く階段付近は燃えが酷く、行く事が難しいです」

「・・・何人か、音楽室まで行ってくれる奴はいるか？」

「はい、僕が行きます」

「僕も」

「よし、じゃあ小暮と古谷、頼むぞ。戻る時は窓から2階のパソコン室に下りてくれ。他の者はそれまでに2階の消火をする。いいな」

「はい！」

小暮と古谷、2人とも消防士になり同じ場所に配属された。

「部長、副部長コンビ、復活かな？」

「そうだな」

古谷はにやりと笑いながら、音楽室へ続く階段を駆け上り小暮もそれに答え駆け上がる。

「うわ、燃え方凄いな。あの時と同じか？」

「そうじゃないかな？とにかく音楽室の中に行こう」

音楽室はまだ入り口付近と窓付近が燃え始めたばかりだが、全体が燃えるのも時間の問題だ。

「部室のほうかな？」

「だろ。まさか此処に居る訳には行かないし」

そんな会話をしながら、部室のほうに行く。

「誰がいる？」

「……此処……」

小暮が声を掛けたのに、1人の生徒が答えた。

「大丈夫？」

「私は大丈夫ですけど、国沢さん……彼女が足を挫いちゃって」

確かに彼女の後ろにはもう一人生徒がいた。

「他にはいないね。残されてる人は」

「はい。部長の私と、副部長の彼女が最後に避難しようとしたから」

「部長か……京太よりしっかりしてるな」

「うるせえ。さっさと行くぞ」

「はいはい。じゃ、ロープを下ろすから僕とえっと……国沢さんが先、彼、小暮と貴方が後から降りてください」

古谷が二人の生徒に説明する間、小暮がロープを結びつける。

「ロープOKだ。古谷、行けよ」

「わかった。国沢さん、ロープで結んでいるけど、しっかりつかまってるね」

「はい」

古谷は国沢が自分の肩をしっかりとつかんだのを確認して、

「じゃ、京太下についたら声掛けるから」

そう言ってロープを下っていく。

「下につくまでにこっちも準備するか。ロープで体、結ぶね。えっと・・・」

「にしかど西門です」

「西門さんか・・・」

「あの、小暮さん？吹奏楽部の部長だったんですか？」

「えっ、ああそうだよ。此処のね。ついでに言えば古谷、あいつも此処の吹奏楽で副部長やってたし」

「二人とも、此処の先輩なんですか」

「まあそうなるね」

そんな会話をしているうちに、古谷から降りていいと合図があった。小暮はそれを確認すると、西門の事を背負い、

「じゃ、降りるよ。しっかりつかまってね」

「はい。あと、下に下りて一段落したら、昔の事教えて下さい」

「時間があればね」

そう言って、ロープを少しずつ下っていく。

窓の近くの耐震補強の柱に足をつけ、中に入る。

「はいよ」

小暮はそう言って西門を下ろす。

「京太、こっち。いつ火が吹き出すか分からないから、急いで」

「分かった。いくよ」

「はい」

3人はその教室から急いで飛び出した。

最終ページ

あれから2時間、火が消し止められ消防が撤収した後、4人はまだそこにいた。

「前と同じ、か」

「……日記に続きを書こうつと。今日は」

「え？」

武藤の言葉に、3人は顔を見合わせる。

「何で？別にいいんじゃない？」

「いいんだよ。これもある意味思い出さ」

「……そうですね。私も日記に書こうつと。あ、谷先輩次の小説この事ってどうですか？」

「うーん……いいかもしれないけど売れるわけ無いな。あの文じゃ」

「うっ……」

「あはははは。谷先輩、厳しいですね。編集者として」

「当たり前」

暫くそこには笑い声が響いていた。

「あ、まだいた。よかったまにあった」

「？あ、京太じゃん。どうしたの？」

軽く顔にすすをつけた小暮と古谷、それに西田がやってきた。

「え、彼女がさ俺らの代の吹奏楽の事聞きたいって」

「じゃ、皆で少しづつはなしますか」

「どっか暖かい所で。此処じゃ寒くって」

宮村が言ったひとことで再び移動し、また吹奏楽の話に花が咲いたのは言うまでも無い。

暫くして……

「真弓、電話。安西さんから」

「はい……もしもし？」

『みやっさん？小説見つけたよ。しかも吹奏楽の事書いた奴。』

「あ、もう見つけたの？はやいなあ」

『ふふふ。ま、それだからじゃあね』

そう言って安西は電話を切った。

「さ、再開再開」

「はい。頑張ります」

日記のページは、これで全て使い尽くしてしまった・・・

最終ページ（後書き）

かなり雑で、強引ですがこれで完結とさせていただきます。

いままで呼んでくださった方々、ありがとうございます。

気が向いたら、付けたし等しているかもしれませんが

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8219c/>

日記

2010年10月9日19時57分発行